

薬物依存症回復者の語りが看護学生にもたらず当事者イメージと学びについて

木村 幸代 本田 優子 一柳 理絵 青木 涼子

創価大学看護学部

キーワード：看護学生、薬物依存症回復者、精神看護学、当事者参加授業

I. 緒言

文部科学省における看護学教育に関する検討を経て、日本看護系大学協議会は、会員校の意見聴取など検討を重ね「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」を提示し、その1群に「対象となる人を全人的に捉える基本的能力」を置いた（一般社団法人日本看護系大学協議会，2018）。この報告書において、「I群 対象となる人を全人的に捉える基本的能力」は、II群からV群までのすべてのコアコンピテンシーの基盤となるものであると位置づけられており、看護師を目指す上ではもとより、学士課程での学習としても基本的で重要な意味を持つと考える。臨地実習の看護展開において対象者の理解は基本的能力として必要不可欠であり、そのために1、2年生の学内での看護技術演習では患者や高齢者の疑似体験、授業構成の中に当事者参加授業を展開するなど、様々工夫がなされている。近年では、映像を活用した授業やVR（Virtual Reality）を取り入れた授業の在り方も様々検討されており（廣瀬，2018；山川ら，2018）、学生がより患者の立場に立てる看護教育方法が報告されている。

筆者が担当する精神看護学領域で扱う疾患や

障害の理解を考えると、学生が精神疾患や障害を持つ人と関わる機会はさほど多くなく、精神疾患や障害を持つ患者を一人の「人」としてとらえ、対象者をより深く理解するためには授業での工夫が必要で、その方法の一つとして当事者参加授業がある。精神看護学教育における当事者参加授業を取り入れた先行研究としては、事前の読書課題や映像、当事者参加授業を組み合わせ合わせた教育的介入が精神障がい者への理解を促進した（船越ら，2009）との報告や、精神症状や当事者の生活の実際を理解し、精神障がい者への学生の認識が変化した（小坂ら，2014）、授業で対象理解が深まると実習においても対象理解につながり看護援助に活用できた（田中ら，2017）、などの報告があった。また、精神障がい者の家族を迎えての当事者参加授業の展開を行い、学生の理解につなげる工夫もみられた（松下ら，2010）。

A 大学看護学部においても精神看護学教育における対象者理解を深める工夫の一つとして、2年次秋学期開講の精神看護援助論の授業の中で、薬物依存症から回復し支援者として当事者グループの運営に携わっている方に、外部講師として1コマ講演を依頼している。学生の薬物依存症（者）に対しての知識は教科書が中心で、それ以外では大麻や覚醒剤など違法薬物使用や保持による検挙事例として、テレビやネ

ットニュースなどでの報道、SNS（Social Networking Service）などの情報が大きいと思われる。そういった意味からも、当事者の経験した身体的、心理的、社会的体験を生々の声で受け取れる、外部講師による講演は学生にとって貴重な学びの機会となっている。

薬物依存症に関しての当事者参加授業の研究報告としては、阿部ら（2012）が、当事者の語りを聴いた看護学生は薬物依存症者への理解が深まったこと、当事者の心情に触れイメージが変化して、偏見の緩和につながったことなど、当事者の語りを授業に取り入れる意義を示していたものの、報告数は少ない。

そこで、薬物依存症回復者の講演を聴講することで、学生が持つ薬物依存症者に対する聴講前後のイメージや認識を把握し、学生は何を学んだのかを明らかにし、今後の授業展開の検討に役立てたいと考えた。

本研究の目的は、薬物依存症回復者の講演を聴講した学生への授業アンケートを基に、聴講前・後の看護学生の薬物依存症者に対するイメージの把握と学びを明らかにすることである。

II. 研究方法

1. 授業の位置づけと調査対象者

本授業は2年次秋学期に開講する精神看護援助論、23回授業中の1回（90分間）で、「依存症を持つ人への支援と当事者活動 当事者の体験を聴く」と題して対面で行った。講演者は講演経験を有する、薬物依存症回復支援施設の運営に携わる40代男性と、その利用者30代男性の計2名。主な依存薬物は覚せい剤、市販薬（ブロン）であった。

調査対象者は、2018年度に精神看護援助論を履修した83名。当該授業に出席しWebアンケートに回答し、研究に同意を得られた学生は54名、約65%であった。

2. 調査方法および調査内容

授業開始前に科目責任者から、大学ポータルシステムを利用した「授業後アンケート」があることを伝えた。さらに授業終了後にも再度「授業後アンケート」への協力を依頼し、パソコンや携帯電話から入力する形で、1週間以内の回答を求めた。

アンケートの設問は、①薬物依存症者に対する聴講前のイメージをお聞かせください。②薬物依存症者に対する聴講後のイメージをお聞かせください。③講演を聞いて学んだことをお書きください。④疑問に思ったことや質問したかった事があればお書きください。の4問であるが、本研究での調査対象は、①、②、③とした。

3. 分析方法

アンケートへの回答は質的統合法（KJ法）を用いて分析した。学生の回答をその意味内容に沿ってコード化し、コードごとに類似性を見出し、サブカテゴリーとする。さらに抽象化をもってカテゴリー化した。それらの分析過程は共同研究者とともに検証し、質的研究に精通した研究者からのアドバイスのもと、客観性と妥当性を検討した。

4. 倫理的配慮

本研究のデータは、授業の一環として受講生から提出された大学ポータルシステム上でのアンケートであるため、事前に同意を得るのではなく後日受講生に対し、授業アンケートの研究利用に対しての説明を講義連絡にて一斉メールを行った。説明内容として、個人が特定されない状態であること、研究利用に同意しない場合でも不利益は生じないこと、本研究結果を今後の授業に生かしていくこと、看護系学会での発表を予定していることなどを示し、研究参加を希望しない受講生からは、その旨返信を受け、研究データから除外することとした。

本研究はA大学人を対象とする研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：

30088)。本研究で開示すべき利益相反はない。

Ⅲ. 結果

1. 調査結果概要

調査対象者54名全員から①薬物依存症者に対する聴講前のイメージ、②薬物依存症者に対する聴講後のイメージ、③講演を聞いて学んだことのアンケートデータを得られ、それぞれ分析を行った。

分析結果は、以下に上位カテゴリーは《 》、カテゴリーは【 】, サブカテゴリーは〈 〉で示す。

2. 薬物依存症者に対する聴講前のイメージ

表1の通り、聴講前のイメージは101のコードが抽出され、分析の結果、2つの上位カテゴリーと8つのカテゴリー、20のサブカテゴリーが生成された。

《薬物依存に陥る人・状況・将来のイメージ》は、【薬物依存症者の人物像】【薬物に手を出す状況】【薬物依存の常態化】【薬物依存による症状】

【薬物依存症者の末路】【克服の可能性】の6つのカテゴリーから、《薬物依存症者に対する心理的距離感のイメージ》は、【遠い存在】【拒否的感情】の2つのカテゴリーから構成された。

《薬物依存に陥る人・状況・将来のイメージ》では、【薬物依存症者の人物像】において〈反社会的思考のある人〉〈意志が弱くて流されやすい〉〈感情のコントロールができない〉など5つのサブカテゴリーで構成されていた。【薬物に手を出す状況】においては〈薬物への軽い気持ち〉〈人的環境の影響〉、【薬物依存の常態化】においては〈やめられない薬物〉〈社会に馴染めず現実逃避〉、【薬物依存による症状】においては〈精神異常状態の継続〉〈会話の困難さ〉、それぞれ2つのサブカテゴリーで構成されていた。【薬物依存症者の末路】においては〈社会生活の崩壊〉〈家族関係の崩壊〉〈最後には死を招く〉など3つのサブカテゴリーで構成されていた。一方、【克服の可能性】は〈克服の可能性〉と同様の1つのサブカテゴリーで、きっかけがあれば薬物依存症を克服できる可能

表1 薬物依存症回復者の講義聴講前のイメージ

上位カテゴリー	カテゴリー (8)	サブカテゴリー (20)	主なコード (コード:101)
薬物依存に陥る人・状況・将来のイメージ	薬物依存症者の人物像	反社会的思考のある人	暴力団関係の人・反社会的な集団・犯罪者
		意思が弱くて流されやすい	意思が弱い・周りに流されやすい・自己管理できない
		感情のコントロールができない	テンションの波が激しい・怒りっぽい・欲求を抑えられない状態
		対人関係の問題や苦しみを持つ	家庭の問題を抱えている・友人関係がうまくいってない
		自分の欲望や快楽を求めている人	違法薬物を吸うことで快感を得ている・ストレスを発散している
	薬物に手を出す状況	薬物への軽い気持ち	遊びのつもりでやっている・タバコやお酒と同じような感覚でやっている
		人的環境の影響	悪い友達に誘われることで始める・悪い人たちとつながりがあった
	薬物依存の常態化	やめられない薬物	やめたくてもやめられない・薬物がないと生きていけない
		社会に馴染めず現実逃避	社会に馴染めない・孤独を感じる
	薬物依存による症状	精神異常状態の継続	精神異常状態になる・幻聴幻覚によって暴れだす
		会話の困難さ	ろれつが回らない・普通に会話ができない
	薬物依存症者の末路	社会生活の崩壊	社会に戻ることが困難・普通の生活を取り戻すことはむづかしい
		家族関係の崩壊	家族が悲しむ・家族との関係構築がむづかしい
		最後には死を招く	頑張っても治すか死ぬか・最後には亡くなっていく
克服の可能性	克服の可能性	きっかけがあれば克服できる	
薬物依存症者に対する心理的距離感のイメージ	遠い存在	芸能人などに多い	夜の世界の人・芸能人
		自分とかけ離れた存在	自分には遠い存在・理解できない・世界観が違う
	拒否的感情	軽蔑と偏見	軽蔑する・嫌悪感・偏見を持った
		関わりたくない	関わりたくない・距離を置きたい
		哀れみ	かわいそう・自分の行いを後悔

性を示していた。

《薬物依存症者に対する心理的距離感のイメージ》では、【遠い存在】において〈芸能人などに多い〉や〈自分とかけ離れた存在〉の2つのカテゴリ、【拒否的感情】においては〈軽蔑と偏見〉〈関わりたくない〉〈哀れみ〉の3つのサブカテゴリで構成されていた。

3. 薬物依存症者に対する聴講後のイメージ

表2の通り、聴講後のイメージは138のコードが抽出され、分析の結果3つの上位カテゴリと9つのカテゴリ、25のサブカテゴリが生成された。

《薬物依存症者の背景や生活のイメージ》は、【薬物に手を出す状況】【薬物依存症は身近な存在】【薬物依存症者の辛い生活】【絶望感と現実逃避】【性格や傾向性】【依存症と向き合い回復を目指す】の6つのカテゴリから、《回復へのイメージ》は、【依存症者の回復を信じる】【変化した感情への気付き】の2つのカテゴリから、《支援者としてのイメージ》は【回復への支援に向けた視点】の1つのカテゴリから構成された。

《薬物依存症者の背景や生活のイメージ》において、【薬物に手を出す状況】では〈生き辛い背景の存在〉〈きっかけは友人や居場所探し〉〈過度な目標や願望への執着〉、【薬物依存症は身近な存在】では〈誰にも危険性がある〉〈特異な人ではない〉〈市販薬でも起こす可能性〉、【薬物依存症者の辛い生活】では〈苦しみを抱えた生活〉〈葛藤と苦しみ〉〈社会から孤立した生活〉、それぞれ3つのサブカテゴリから構成されていた。【絶望感と現実逃避】では〈喪失感と絶望〉〈現実逃避のための薬物使用〉、【性格や傾向性】では〈気持ちが不安定〉〈責任感が強くまじめ〉、それぞれ2つのサブカテゴリから、【依存症と向き合い回復を目指す】では〈自分との戦い〉〈懸命に生きている〉〈依存から脱したい強い意志〉の3つのサブカテゴリから構成されていた。

《回復へのイメージ》において、【依存症者の回復を信じる】では〈擁護的感情〉〈回復の可能性を信じる〉〈断薬後の人生への希望〉の3つのサブカテゴリから、【変化した感情への気付き】では〈自分の偏見への気付き〉〈負のイメージからの変化〉の2つのサブカテゴリから構成されていた。《支援者としてのイメージ》においては、【回復への支援に向けた視点】の1つのカテゴリで、〈回復への手立て〉〈支援への気持ちの芽生え〉〈ピアとしての支援の意味〉〈回復の意味付け〉の4つのサブカテゴリで構成されていた。《回復へのイメージ》や《支援者としてのイメージ》は聴講前にはなかったイメージで、聴講からもたらされた新たなイメージである。

4. 薬物依存症回復者の講義を聴講し学生が得た学び

表3の通り、学生の学びは、174のコードが抽出され、分析の結果3つの上位カテゴリ、8つのカテゴリと19のサブカテゴリが生成された。

《回復への過程》は【生き辛い心理社会的背景】【心身の健康や社会生活の崩壊】【困難な回復への道程】【心理社会的再編成】【薬物依存症回復施設の役割と当事者にとっての位置づけ】の5つのカテゴリから、《身近な市販薬の危険性》は【身近な市販薬の危険性】の1つのカテゴリから、《専門職としての意識の芽生え》は【学生としての新たな気付き】【回復を支える視点への気付き】の2つのカテゴリから構成されていた。

《回復への過程》において、【生き辛い心理社会的背景】では〈薬物依存症の背景にある本人の生き辛さ〉〈社会からの孤立〉、【心身の健康や社会生活の崩壊】では〈社会生活の崩壊〉〈健全な心身の崩壊〉、【困難な回復への道程】では〈コントロールできない病気〉〈生涯かけて治療に取り組む〉、【心理社会的再編成】では〈強い意志を持ち回復を目指す〉〈回復過程で社会と

表2 薬物依存症回復者の講義聴講後のイメージ

上位カテゴリー	カテゴリー (9)	サブカテゴリー (25)	主なコード (コード:138)	
薬物依存症者の背景や生活のイメージ	薬物に手を出す状況	生き辛い背景の存在	家庭内の問題など辛いことがある 生き辛さを持った人が多い	
		きっかけは友人や居場所探し	友人からの誘いがきっかけ 自分の居場所を探し薬物を始める	
		過度な目標や願望への執着	認められたいという思いから きっかけは仕事ができるようになりたい	
	薬物依存症は身近な存在	誰にも危険性がある	誰でも薬物依存症になる可能性がある 自分にも依存症の可能性・危険性はある	
		特異な人ではない	私や港そんなに変わらない人 普通の人	
		市販薬でも起こす可能性	市販薬でも依存症をおこしてしまう 咳止めの話をして聞いて怖いと思った	
	薬物依存症者の辛い生活	苦しみを抱えた生活	悩み苦しんでいる 非常に落胆し自分を責める	
		葛藤と苦しみ	抜け出したくても抜けだせない また手を出したくなる	
		社会から孤立した生活	常に社会的孤立を感じている 社会的な死を体験する	
	絶望感と現実逃避	喪失感と絶望	喪失感を感じている 現実に絶望を抱いているイメージ	
		現実逃避のための薬物使用	そこのない不安を薬物で回避 こころの穴を薬で埋めていた	
	性格や傾向性	気持ちが不安定	将来の不安がある人 手を出す人は精神的に不安定	
		責任感が強くまじめ	親の期待に応えなきゃとする人 完璧主義でまじめ	
	依存症と向き合い回復を目指す	自分との戦い	生涯にわたり薬物依存症と戦う人 自分の症状と向き合い頑張っている	
		懸命に生きている	社会の偏見と向き合う 目標に向かって積極的に生きている	
		依存から脱したい強い意志	自らの弱さと向き合う 過ちを受け止め前に進もうとしている	
	回復へのイメージ	依存症者の回復を信じる	擁護的感情	薬物による被害者 一概に依存症者が悪いとは言えない
			回復の可能性を信じる	薬物依存になっても更生できる 治療を受けて社会復帰できる
			断薬後の人生への希望	人生ダメになったわけじゃない やめる事ができれば明るい未来は待っている
		変化した感情への気付き	自分の偏見への気付き	偏見がとてもし大きかった 偏見をなくしていきたいと強く思った
			負のイメージからの変化	イメージが明るくなった 負のイメージが払拭した
	支援者としてのイメージ	回復への支援に向けた視点	回復への手立て	頼れる人がいることが大切 仲間の回復過程を知ることが効果的
			支援への気持ちの芽生え	自分の力で律していけるよう支えたい 臨床で出会ったらかかわっていききたい
			ピアとしての支援の意味	経験者だからサポートしていける 経験者だから寄り添うことができる
回復の意味付け			薬をやめ社会に出ていく事ができて回復したといえる	

表3 薬物依存症回復者の講義を聴講し学生が得た学び

上位カテゴリー	カテゴリー (8)	サブカテゴリー (19)	主なコード (コード:174)
回復への過程	生き辛い心理 社会的背景	薬物依存症の背景にある本人の 生き辛さ	依存することは何かしら生き辛さを抱えていると思った
			薬物使用には必ず使用する背景がある
		社会からの孤立	依存症の人は助けを求めても社会から取り残される
			依存症には社会的死があることを学んだ
	心身の健康や 社会生活の崩壊	社会生活の崩壊	回復過程はつらいもので経済的にも困難があるとわかった
			一度の薬物使用が一生をも台無しにする
		健全な心身の崩壊	身体的・心理的・社会的死に至る危険行為だとわかった
			依存症は自傷行為であり当事者の心の叫びであると思った
	困難な回復への 道程	コントロールできない病気	依存症は自力でコントロール不能になる怖さがあることを学んだ
			依存症はやめる約束を守りたくてもむづかしい
		生涯かけて治療に取り組む	回復過程はとても長くステップがある
			薬物はやめ辛く生涯治療と向き合う必要があることに衝撃を受けた
	心理社会的 再編成	強い意志を持ち回復を目指す	心が弱いと思っていたが薬物をやめられる強さがある
			生涯葛藤し自身と戦っていることを学んだ
		回復過程で社会とつながる大切さ	依存からの回復は社会の中でやっていかねばならないと理解できた
			社会とのかかわりが復帰意欲に影響する
薬物依存症回復 施設の役割と 当事者にとって の位置づけ	薬物依存症回復施設での活動 と機能	薬物依存症回復施設は仲間同士助け合って回復を目指すことに理念を置いていると知った	
		その人の経験や強みを生かした仕事の支援をしている	
	安心できる居場所	なんでも語り合い刺激しあえる仲間の存在や環境は大切で安心できる	
		薬物依存症回復施設には同じ依存症者だからこそできる支援がある	
身近な市販薬の 危険性	身近な市販薬の 危険性	咳止め薬でも薬物依存症になってしまうことを初めて知った	
		依存症はドラッグストアで買える薬も原因になる身近な存在と学んだ	
		薬物依存症は身近で決して甘く見てはいけない	
専門職としての 意識の芽生え	学生としての 新たな気付き	体験者としての役割の価値づけ	当事者が体験や感情を語ることは薬物の乱用を防止することができる
			回復者には経験を活かし依存症者を助ける使命があると感じた
		啓発活動の必要性への気付き	正しい知識を提供できる機会が増えると当事者も共存しやすい社会になるのではないか
			地域住民が薬物依存症を正しく理解することは大切
	自身の偏見への気付き	自分に潜んでいた偏見に気づいた	
		自己イメージだけで接するべきではないとわかった	
	学びの必要性への気付き	社会で苦しんでいる人のためにも力をつけなければと強く感じた	
		依存症者の体験から予防の方法を学ぶことが大切だと思った	
	回復を支える 視点への気付き	当事者へのかかわり方の視点	自分の人生の問題に正面から向き合えるような支援が必要と思う
			人として関り耳を傾け温かい目で支援することが大切だと学んだ
		当事者を認め受け入れる視点	支援者はその人の気持ちを否定することなく全てを受け止める気持ちが大切だ
			本人の思いを受け止め尊重する姿勢が心を開くと思う
背景や経緯をより深く捉える		薬物使用の背景をより深く知る必要があると感じた	
		回復には薬物使用の背景の問題のケアが必要と学んだ	
看護師としての役割の認識	自分を変えようとしている患者に寄り添い社会につなげていくことが看護師の役割だ		
	看護師は肯定的に共感して寄り添うべきではないか		

つながる大切さ)、【薬物依存症回復施設の役割と当事者にとっての位置づけ】では〈薬物依存症回復施設での活動と機能〉〈安心できる居場所〉など、それぞれ2つのサブカテゴリーで構成されていた。《身近な市販薬の危険性》は上位カテゴリーと同様の1つのカテゴリー、1つのサブカテゴリーで、構成されていた。また、《専門職としての意識の芽生え》において【学生としての新たな気付き】では〈体験者としての役割の価値づけ〉〈啓発活動の必要性への気付き〉〈自身の偏見への気付き〉〈学びの必要性への気付き〉、【回復を支える視点への気付き】では〈当事者へのかかわり方の視点〉〈当事者を認め受け入れる視点〉〈背景や経緯をより深く捉える〉〈看護師としての役割の認識〉など、それぞれ4つのサブカテゴリーで構成されていた。

IV. 考察

1. 薬物依存症及び依存症者に対する学生のイメージ

本研究では薬物依存症回復者の講演を聴講したのちに、授業後アンケートとして「聴講前のイメージ」と「聴講後のイメージ」の回答を求めているため、聴講前後のイメージの変化を述べるには至らないが、学生は、アンケートに回答することで、それまで持っていたイメージから変化したことを改めて認識できたのではないかと考える。

村田ら(2017)は、精神障害を持つ当事者参加授業において、学生が不安や苦悩を抱えながらも人として前向きに生きようとしている一人の人間として、当事者を理解することができていたことを報告していた。本研究においても、学生は講師の語りから発せられる言語的、非言語的表現から、依存症の症状や依存症を抱えて社会生活を送ることの困難さ、依存症に陥った人の苦しみや後悔、回復に向けての努力の姿勢やその後の人生に対する希望など、イメージを

より鮮明にすることができていた。そして不安や苦悩を抱えながらも前向きに生きていこうとする一人の「人」として理解できたからこそ、薬物依存症回復者をより現実的な「人」としてとらえることができ、支援者としてのイメージ獲得に至ることができたと考える。これらのことから、薬物依存症回復者の講演は、学生個々が認識していたイメージに変化をもたらす起因となり、薬物依存症者をより現実的な「人」としてとらえるイメージの変化に影響を与えていたことが推察される。

2. 薬物依存症回復者の講義を聴講し学生が得た学び

1) 回復過程における地域ケア継続の重要性

松本(2020a)は、薬物依存症からの回復のために医療者は何ができるかを述べた論文の中で、「薬物依存からの回復は、地域内でのケアを長く続けるほど効果的であることは治療ガイドラインでも明文化されている。」さらに「薬物依存症は、糖尿病と同じような慢性疾患であり、治療目標は、1～2年といった短期的断薬ではなく、地域でのケアの継続性にこそ置かなければならないからだ。」と述べている。これに関連して、学生は薬物依存症が〈生涯かけて治療に取り組む〉必要があること、〈回復過程で社会とつながる大切さ〉〈薬物依存症回復施設での活動と機能〉や、薬物依存症回復施設が回復を目指す人の〈安心できる居場所〉であることなど、地域でのケア継続の重要性を的確に学んでいた。そしてこのような地域ケア継続の中で、本人の【心理社会的再編成】がなされ、回復につながっていく事を学び取っていたことが見て取れる。これらの学びは、将来学生が医療の現場で薬物依存症患者にかかわる機会があった場合、回復を目指す当事者やその家族のみならず、支援に携わる医療職者との連携や、支援者とのネットワーク構築の際の一助にもなり得ることから、大きな意義があったと考える。

2) 回復過程をケアすることの奥深さ

成瀬 (2019) は「回復のためには薬物使用の有無ばかりにとらわれた近視眼的なかかわりになることなく、その背景にある生きにくさ、孤独感、安心感・安全感の欠如、などを見据えた支援でなければならない。」と述べているが、本研究においても学生が薬物依存症回復者の話から、人生の背景や生き様などその人自身にコミットする必要性、当事者が持つ苦しみや将来への希望など様々なことを学び、感じ取っていたことがうかがえる。これに関連して、Mayeroff は「ケアの本質」(田村、向野訳、2014)の中で、他の人をケアすることについて、「あたかも相手が標本であるかのように見るのではなく、相手の世界で相手の気持ちになることができなければならない。その人にとって人生とは何なのか、その人は何になろうと努力しているのか、成長するためにその人は何を必要としているのかなどを、その人の“内面”から感じ取るために、その人の世界へ“入り込んで”いくわけである。」と述べている。つまり、その人の人生や様々な背景にコミットし、その人が持つ人生観や価値観にまで想像力を働かせ、寄り添い、その人を知ることによって、本質的な「人」へのケアがなされるということではないだろうか。学生はまさに、講演している薬物依存症回復者、その人の世界へ入り込み、その人を理解しようとしたことで、困難な回復過程への挑戦の姿勢に価値を見出し、ケアすることに対し様々な学びを得たのではないかと推察される。そういった知識や感情が、学生自身の振り返りと相まって、看護師を目指す学生として、薬物依存症回復者を支援する《専門職としての意識の芽生え》に繋がったと認識している。まさに学生は、回復過程をケアすることへの奥深さを学んでいることが示唆された。

3) 自身に引き当てて健康と生活を振り返る

学生が《専門職としての意識の芽生え》に繋がったもう一つの要因は、薬物依存を遠い存在としてとらえていた学生が身近な危険性のある

ものとして認識できたことである。薬物使用による依存症という、覚せい剤、大麻などの違法薬物を想像しがちであるが、実はドラッグストアなどで売られている風邪薬なども依存症や中毒症状を引き起こす原因になっている(松本、2020b; 廣瀬ら、2020)。看護学生は学年が上がるにつれ、より専門性が高くなり、科目ごとの課題も多くなる。特に各領域で行われる臨地実習は長期間に及び、生活や学習のリズムをどのように作り、健康な状態をどのように保持していくかも大きな課題になる。よって、安易に睡眠薬や風邪薬などを使用することへの警鐘を鳴らす機会となった今回の講演は、看護学生にとって、自身の健康と生活を振り返るための貴重なきっかけになったと考えられる。本研究において、学生が《身近な市販薬の危険性》を認識できたことは、自身の健康と生活の振り返りにとどまらず、自身に引き当てて考え、専門職としての意識を持つに至ったと推察される。

4) エンパワーメントされた学生の学び

《専門職としての意識の芽生え》については、講演者の赤裸々と語られる臥薪嘗胆の思いや自身の人生の再構築を目指す努力の足跡を受け止め、〈体験者としての役割の価値づけ〉〈啓発活動の必要性への気付き〉〈自身の偏見への気付き〉〈学びの必要性への気付き〉など自身を振り返りつつ【学生としての新たな気付き】が大きく影響していると考えられる。そして、看護職という限定された範疇にとらわれず【回復を支える視点への気付き】を得て、学生は単に看護を目指す学生ということのみならず、人として共生社会を目指す人間力醸成の機会を得る機会になったといっても過言ではない。また、先に述べた通り、薬物依存症をより現実的、身近に考えられたことも学生の学びと成長に大きく影響している。これら一連の過程は、薬物依存症回復者の講演によって学生がエンパワーメントされ、様々な感情や学びが引き出された結果ではないかと推察している。渥美 (2012) は、精神

障害を持つ当事者参加授業において、学生が人間としての課題を認識できたことの重要性を、「当事者の姿にエンパワーメントされ、自己を振り返ることによって自分の中にあった偏見に気づき、看護を目指すものとして当事者を、学生自身や社会との関係において包括的に理解する機会になっている。」と述べている。また、仲谷ら（2008）も当事者参加授業の教育的成果として、学生がエンパワーメントの体験を通して自己成長がみられるなど複合的の学びをしていることを報告している。本研究においても、学生は薬物依存症回復者の姿や実体験に基づく講演からエンパワーメントされ、その人の人生に価値を見出し、彼らを支援する看護師の視点にとどまらず、学生自身の学び、成長へとつながっていたことが示唆された。

V. 結論

1. 薬物依存症回復者の講演は、学生個々のイメージに対し変化をもたらす起因となり、現実的な「人」としてとらえるイメージの変化に影響を与えていたことが推察される。
2. 薬物依存からの回復は、支えあう仲間や薬物依存回復支援施設のような地域の社会資源を活用した、地域ケアの継続が効果的であることを学んだ。このことは、支援に携わる医療職者との連携や、支援者とのネットワーク構築の際の一助にもなり、今後保健医療福祉を背景に活躍する学生にとって、大きな意義があったと考える。
3. 学生は、対象者の表面的な現状だけでなく、心理社会的背景にもコミットし、人として理解する重要性など、回復過程をケアすることへの奥深さを学んでいることが示唆された。
4. 薬物依存症は市販薬でも起こりうる身近な存在であることを学生が認識できたことは、自身の健康と生活を振り返る機会になった。また、自身に引き当てて考えられたことが、専門職としての意識を持つことに繋がった要因の一

つであると推察される。

5. 学生は薬物依存症回復者の姿や実体験に基づく講演からエンパワーメントされ、彼らを支援する看護師の視点にとどまらず、学生自身の学び、成長へと繋がっていたことが示唆された。

VI. おわりに

今後の課題として、伝える側の主観が先行してしまう可能性を教員が認識する必要があること、また、過度な支援は本人の自立を阻害し、共依存にもつながるなど、看護する姿勢や支援する側とされる側の程よい距離感を、学生が考えられるよう指導していく必要があることが挙げられる。今後学習支援上の課題も意識しつつ、このような当事者参加授業を継続し、学生のさらなる学びに貢献していきたいと考える。

VII. 引用文献

阿部千賀子, 寺岡貴子 (2012): 薬物依存症回復者の「語り」を聴いた学生の気づき. 日本精神科看護学術集会誌, 55 (1), 536-539.

渥美一恵 (2012): 当事者参加授業による教育成果の検討—精神保健論の授業記録から—. 日本看護学会論文集 教育学, 42, 112-115.

船越明子, 田中敦子, 服部希恵, 他 (2009): 当事者参加型授業を含む複数の教材を用いた教育的介入が看護学生の精神障がい者への対象理解に与える影響. 三重県立看護大学紀要, 13, 20-36.

廣瀬正幸, 平川昭彦, 中野裕子, 他 (2020): 一般用医薬品による中毒患者とその対策. 日本臨床救急医学会雑誌, 23 (5), 702-706.

廣瀬通孝 (2018): 教育における VR の活用を展望する. 看護教育, 59 (2), 86-90.

一般社団法人 日本看護系大学協議会 (2018): 看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標. <https://>

www.janpu.or.jp/file/corecompetency.pdf

小坂やす子, 黒木雅美, 文鐘馨 (2014): 精神障がい者の理解を深める当事者参加授業の学習効果. 日本看護学会論文集 看護教育, 44, 46-49.

松本俊彦 (2020): 薬物依存症からの回復のために医療者は何ができるか 新薬と臨床. 69 (1), 29-32.

松本俊彦 (2020): 市販薬の依存 治療, 102 (3), 328-332.

松下年子, 小倉邦子 (2010): 当事者家族による精神看護学授業の有用性. 埼玉医科大学看護学科紀要, 3 (1), 31-38.

Milton Mayeroff (1971/2014). 田村真, 向野宜之 (訳), ケアの本質—生きることの意味— (第22刷) (pp. 93). ゆみる出版.

村田ひとみ, 野崎裕之, 木村由美, 他 (2017): 精神障がい当事者参加型授業における学生の学びと学習課題. 日本精神科看護学術集会誌, 60 (2), 200-204.

仲谷千尋, 森川三郎, 上田康子, 他 (2008): 看護基礎教育における当事者参加授業の教育成果と課題, 目白大学 健康科学研究, 1 (1), 139-147.

成瀬暢也 (2019): 薬物依存症の治療と回復. 医学のあゆみ, 271 (11) 1221-1225.

田中千絵, 矢野優, 杉浦浩子 (2017): 当事者参加型授業の精神看護学実習における学びの活用状況. 日本看護学会論文集 精神看護, 47, 151-154

山川みやえ, 古谷和記, 内藤知佐子 (2018): 患者の立場に立てる教育方法を目指して. 看護教育, 59 (2), 92-99.